

田舎特有の無遠慮な親近感と、自分と同じ種類の人間しか受け入れないぞといわんばかりの島国根性。

「ああ」と凜子は小さく叫んで、こげ茶色の天井を仰いだ。幾筋もの煙草の煙が縦にまつすぐにのぼっていくのが見える。

「まあまあ、きれいに手入れをして。やっぱり、東京のひとはちがうなあ」

そのとき佑介の伯母、つまりは静恵の姉で、地元の工場で働く文恵は、凜子の指先を見ると突然、感嘆の声をあげた。

いつも友人から「もっと頻繁に手入れしなよ」と注意されている爪である。

自分のそんな指先でさえ、この女性たちの目には、きれいに手入れされた爪、に映る。

いつもなら無精者と思われるのを恐れて爪を隠していたが、いまは別の理由で、凜子は顔を真っ赤にしながら、指をひっこめなければならなかった。長さも艶も完ぺきには程遠い自分の爪を見せまいと指を折り、そつとテーブルの下にしのはせる。

都会のひとだから、東京から来たひとだから、

とことあるごとくに言うけれど、自分はそんなに彼女たちとちがっているのだろうか。

少々いじけながら、「おてもと」と書かれた箸のケースで箸置きを折り、その上に箸を休ませようとしていたら、またどこからか声が聞こえた。

「ちよつと、あれ見てみ。祐ちゃんのええひと、あんなことしてる。お上品やなあ」

くすくすと笑う声や好奇の目が、凜子の後頭部あたりに突き刺さる。

穴があれば入りたかった。外に列車が止まれば、さつさと乗り込んで、東京へ連れて帰ってほしかった。

時計を見る。まだ九時十分。

きつと佑介は今晚も飲み歩き、帰宅するのは、日にちが替わってからになるのだろうか。

今日は家にいてよ、と頼んでみても、彼は「大事な寄り合いや」という一言で片づけ、家を出て行ってしまふ。

ここにいるときの彼は、彼ではない。東京にいるときの、凜子が知っている佑介ではなかった。

男たちと肩を組み、伊勢音頭を声高らかに歌い、一升瓶ごと酒を飲み干すと、真っ赤になった顔で空き瓶を指差し「さっさと片付けろ」と凜子に指示をする。

今日だけでなく、明日も、お祭り当日も、このような宴会がくり広げられ、凜子はてのひらを返したような佑介の言動に驚かされるのである。

東京の自分の小さなアパートの一室や、穏やかに日の差し込む明るいオフィスでは、考えられないような会話が飛び交う。

「お姉さん、佑介とこの子どもは何人の予定なの？」

「このどもの名前は、もう決まってるの？ 昭介、佑介ときたら、次は何介だい？」

昭介とは佑介の父である。昭介は、顔を赤らめて、となりの男に酌をしている。

「やっぱり、このもは三人か四人はほしいなあ。佑介の弟のところは三人だから、対抗して四人は産みや」

若い男女が結婚すると聞くと、必ずと断言していきなり、馴れ初めやこのどもの数を話題に出すと

ころもまた、凜子の田舎の人々と同じだった。

たったひとりのこどもさえも、産むことができ  
るかどうかわからないのに、と凜子は心のなかで  
つぶやき、肩を落とした。

テーブルの下では、さきほどおもしろおかしく  
賞賛された爪を、もう片方の手の爪で、ガリガリ  
と意味もなく削っていた。

ちいさなため息が何度ももれる。これは結婚の  
序章に過ぎないのだろうか。氷山の一角でしか  
ないのだろうか。結婚をしたらこんなことが日常  
茶飯、永遠にくり返されるのだろうか。

凜子がそんなことをあれこれ考え込んでいると、  
「ちよつとごめん」と叫んで、凜子のとなりにい  
きなり割り込んでくる女性がいた。

「しんどうない？だいじょうぶか？」

「はい」

凜子はとっさに答える。

「あのひとたちの言うことは気にせんでええか  
らな。ほんまはしんどういやる？」

「いいえ」

「無理せんでええ。しんどいはずや。はよう、東京に帰りたいやろ？」

凜子は、思わず深くうなずいてしまった。

「よう考えや。一生に一度のことや」

「は？」

「結婚や」

凜子は、さっぱりしたものの言いかたをする突然現れた女性に、一気に親近感がわいた。

「あのう……、ご近所のかたですか？」

凜子は恐る恐る尋ねる。

「私？私のことか？私は晴香。佑介の姉ちゃんや」

凜子は驚いて、声を発することができなかつた。

「佑介はわがままやけんな。それに、この家にあんたはあわん。よう考えて決断しいや。もう一回言うで、一生に一度のことや、結婚は」  
これが姉のいうセリフだろうか。

凜子は佑介の姉の威勢のいい言葉と、その内容に圧倒され、思わず至近距離で彼女を見つめてしまった。

よく見ると、切れ長の目やふつくらとした下唇は、佑介と同じものだった。

幸い、凜子の両隣の女性たちは席をはずしており、酔っぱらった男性たちの笑い声で、佑介の姉の声はかき消された。

「ハルちゃん、ビールもう一本」

名前を呼ばれた晴香は、さっと立ちあがり「あいよ」と答えて、凜子のもとを去ろうとする。その瞬間に、彼女は足にしびれを切らせたようで、渋い顔を凜子に向けた。

凜子は右足を両手で持ち、よろける晴香を見て笑った。晴香は立ち去り際に凜子の耳にこうささやいた。

「ひとには、そのひとにあった居場所が必ずある。あんたの場所はここやない。あんたは、家と結婚するひとやない。ひとと結婚するひとや。そうやろう？」

曖昧にうなずいた瞬間、凜子の頬を、つるつると涙が伝った。

「よう考えや」

このときの晴香の言葉は、佑介の実家にいる

間中、凜子に影響を与え続けることとなった。

このときからだろうか。

凜子はもはや爪を気にすることも、化粧を控えることもしなくなった。東京で装っているものを着、使っている言葉を使い、自分らしくいられるように心がけた。

何かが吹っ切れた、という感じだった。

お祭りの日には、凜子は休日にはいつもそうするのように、栗色の髪をカーラーで軽く巻き、ここへきてからずっとひっ詰めて後ろで束ねていた髪を、肩におろした。爪の甘皮を取り除き、ポケットに突っ込んだままだったピアスをつける。

佑介の姪はいつもとちがう凜子を見て「バービーちゃんみたい」と声を上げ、彼女は急いで母親を呼びに行った。そして、近所には「うちにはバービーちゃんがおる」と宣伝してまわり、実際に凜子を見に来るお年寄りもいた。

佑介の姪や甥の前で、凜子は開き直って、ピエロを演じた。

「ほら、ほんまにバービーちゃんみたいやろ？」

と姪がほかのこどもたちと言うと、凜子は「バービーちゃんです」と言っつて、彼らの前でおどけて見せた。

こども達は奇異の目で、凜子を見つめた。丸く、大きく、澄んだこども達の瞳に、場違いな自分の姿が映る。

この家ではこんな風にしか、自分を表現することができなかつた。

(以上6月27日放送分)